

菊池寛と「よみうり婦人附録」

田鎖数馬

序

菊池寛の「道を訊く女」（大正六年二月『帝国文学』）と「愛嬌者」（大正七年一月『文章倶楽部』）は、これまで、研究対象として注意されることのなかった短篇小説である。本稿では、これらの作品が、『読売新聞』の「よみうり婦人附録」の記事を材源にしていることを指摘しつつ、材源との比較を通して、これらの作品の特質や菊池の創作姿勢を明らかにする。それを手掛かりにして、大正六年、七年にこれらの作品を発表したことの意味を、全体としての菊池文学の傾向との関係、あるいは、同じく「よみうり婦人附録」の記事を材源にしている菊池の「新女性鑑」（昭和三年五月五日〜九月十八日『報知新聞』）との関係を踏まえて、考察する。

一

「道を訊く女」のあらすじは、次の通りである。——「自分」は、「十一月の終に近い」時期の「夜の八時半頃」に、東京駅の近辺で、「女」に呼び止められた。その「女」は「七つばか

りの穢い女の児を連れて居る上に、背中にはその児の弟らしい」児を負っていて、「自分」に「業平橋へは、何う参りますか」と道を訊いてきた。「自分」は、「親切を為すと云ふ快感を見ず／＼逃すのも惜しく思はれた」が、業平橋への行き方を詳しく知らなかったので、この問いに答えられなかった。その後、「女」から徒歩で向かうと聞かされる。「自分」は驚いて、「電車賃がない」のかと質問したところ、「女」は、持ち合わせていないという。そこで、「自分」は、「十銭銀貨」をこの「女」に与えてやることを決心した。ところが、その時、この「女」の言うことは全て嘘で、「物貰ひの新しい技巧だ」という「疑惑が頭を擡げ」て、惑いながら黙ったので、「女」は「お邪魔を致しました」と言って、立ち去った。それからというもの、「女」に対して金銭を「与へないのがいゝのか、騙された知りながら与へるのがいゝかと」時々考えた。「道徳的に孰ちらが正当であるか」よりも、「孰ちらが、自分により多くの快感を与へるか」が問題であつた。「其女が、物貰ひであつた事に就ては其後は愈々確信を強めて行つたが、夫でも自分が十銭を与へなかつた事は不快な記憶であつた、もつと金の沢山ある時であつたら、騙されたと知つても快く与へただらうと思つた」。それ

からしばらく経った「十二月の二十日頃」のある新聞で、「自分」は、S生という名で投書した人物の文章を目にした。そこには、S生が、「東京駅の前で、十二、三の小僧さん風の少年に」道を訊かれたこと、「少年」とのやりとりから、「少年」が、「雇主」に、「電車賃も与へられないまま、遠距離を、徒歩で使いに行くよう命じられたことが分かったこと、そこで、この「少年」に電車賃を与えたことが記されていた。「自分」は、新聞のこの文章を読み、「自分」に道を訊いた「女」と、S生に道を訊いた「少年」とは、ともに「物貰ひ」のための「同じ技巧」を駆使していたのだと確信し、S生が「気の毒」であり、「可笑しくも思った」。しかし、そもそも、「女」と「少年」とが確実に「物貰ひ」であつたと断言することはできないとも思えてきた。そして、ともあれ、「同じ事件にあつて、一種の不快なる記憶を残して居る自分は、同じ事件から、親切を為したと云ふ快感を得て居るS生に比べて、不幸な人間である事丈は、確かであるかも知れない」と考えるようになった。

ところで、菊池のこの作品と類似した「同情心を種に 金品を詐取す」（論者注——以下、「同情心を種に」と略記）という記事が、『読売新聞』大正三年十一月二十七日の「よみうり婦人附録」（論者注——以下、「婦人附録」と略記）に掲載された。この記事の内容を紹介すると次の通りである。——「今月の或る夜のこと」、「某氏夫人が所用の帰途」、「東洋協会学校側まで来ると、深光寺の暗闇から突然一人の男が現はれて、新宿へ参りますにはもうぢきでまいませうか、と先づ尋ねて実は今朝埼玉から参つたもので、これから八王子の知人を尋ねて参るものですが、新宿の甲州街道へ出さへすれば一本道ですから、明日

の晩方迄には行き着かれます、それにこんな者さへ居なければ、少しも困らないのですが、と背中の子供をゆすり上げながら、如何にも哀げに物語るので、思はず引入れられて汽車賃を恵み、帰宅後其由を家族に話すと居合せた夫人の姪も一週間ばかり前に牛込の山伏町あたりで、子供を背負ふたる前記の男に出合ひ、八王子迄の汽車賃を詐取されたさうです、歳末のおし迫るにつれて、金融の道が途絶えるので其日暮しの細民が貧窮の余り、斯くの如き罪惡を敢てするのでありませう」。

ここで、「婦人附録」が創設された経緯や、「婦人附録」の記事の性格について簡単に説明する。大正三年三月十三日の紙面広告で予告されている通り、大正三年四月三日に『読売新聞』の紙面の大改良が行われた。「婦人附録」は、その際に新たに設けられ、大正八年九月十日まで、毎日の紙面を飾ることになる「附録」のページである。永渕朋枝「よみうり婦人附録」にみる大正の世相（平成十年三月『奈良女子大学文学部 研究年報』）によれば、「婦人附録」では「一頁全面を婦人関係記事で埋め」ているが、これは、「日本の新聞界で初めて」の試みであるという。また、「論説というべき「婦人と時勢」、婦人や家庭に関する記事や、時期に応じた特集記事、投書欄「婦人の声」、毎日3枚前後の写真、高木敏雄の「世界童話」などが掲載され、今日の婦人欄の原型がほぼつくられている」こと、「発展の辞」（大正三年四月三日）に、「天下四千万の婦人に対する慰安者、教導者となつて穩健な主張と趣味ある記事を載せ」と要約できる記述があることを踏まえ、「穩健・善導主義が「婦人附録」の前提」となっているとも言えることもまた、右の永渕論文で指摘される。

この「婦人附録」が開始された大正三年四月三日には、「婦人と時勢」と題された、「婦人附録」創設の意図を述べた文章が載せられている。その中で、「女は余り教育をしない方が、却て女のためだと思ふ人もあつた。しかし、少し目先のきくものは、今では誰れもそのやうなことを思つてゐない」と記している。つまり、現在は、女性「教育」が必要な時代であると主張している。その上で、「婦人附録の使命」として、「われ／＼は日々に取り来る、今の社会の出来事を捉へ来つて、婦人と家庭の實際生活に於る幾多の問題に対する真実で間違ひのない解決の好適例を示したい」と表明している。「家庭」という言葉が用いられている通り、「婦人附録」では、「家庭」内の男性に関わる問題も取り上げられている。しかし、「婦人附録」という名称が示すように、「婦人附録」の記事の中心は、あくまでも、女性に関わる問題である。したがつて、「婦人附録」には、「今の社会の出来事」を取り上げ、女性が抱えた「問題」の「解決」の実例を示した、女性に対する「教育」的な意味を持つ記事を主に掲載する方針があつたとする理解がここから導かれる。

ただし、実は、「婦人附録」では、女性が抱えた「問題」の「解決」の実例や「教育」的な見解が明記されてはいない記事の方がむしろ多い。膨大な数の記事の中から二例を挙げるに過ぎないが、例示すれば、「慈愛の手は露兵に及ぶ」（大正三年九月二十日）では、「露国」が「独逸軍にあたつて居」て、「多数の将卒は或は傷つき或は病み、為めに野戦病院は大多忙を極め、全国の看護婦だけにては手廻り兼ねて居る有様なるより我が赤十字社より若干の看護婦を応援として遠征せしめる事になり、

「遠からず我勇敢にして慈悲の権化たる娘子軍は北欧の曠野に於て露国兵の救護に尽す事となる」と記すのみであり、また、「茄子を喰ふと髪が抜ける」（大正四年九月十七日）では、「茄子を喰」えば、「髪が抜ける」、あるいは、「婦人病」になると言われるが、それは迷信に過ぎないと記すのみである。

とはいえ、前者の記事では、「勇敢にして慈悲の権化たる娘子軍」という言葉を用いて、その「娘子軍」として働く女性たちの立派な姿を強調しているので、ここには、その女性たちの姿を、世の女性にとつて見習うべき尊いものと意味付け、女性読者の心を刺激しようとする意図が潜んでいるとは解釈できる。また、後者の記事では、女性の生活の参考になる情報を伝えている。したがつて、これらの二つの記事では、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝える記事内容にはなっている。

「婦人附録」の記事を概観すれば、先の実例や見解を明記していない記事も多いのであるが、その場合であっても、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝える記事にはなっている。そのため、「婦人附録」では、このような話題を伝える記事を主として掲載していると纏めるのが適切である。

さて、このことを踏まえて、「同情心を種に」に改めて目を向ける。この記事では、女性が、見知らぬ「男」から目的地までの道のりに関する質問を受けたという出来事を取り上げつつ、それをきっかけにして「汽車賃」を詐取されたという話を紹介している。これもまた、「婦人附録」に掲載されているのだから、右記の話題を伝える記事であつたと考えてよい。具体的には、類似の出来事に遭遇した時にはどう振る舞うのがよいのかということや女性各自が考えるきっかけとなる（二）、女性

の刺激・参考になる記事であったと意味付けられる。菊池の「道を訊く女」は、こうした記事である「同情心を種に」と類似する話であった。

菊池は、『忠直卿行状記』（昭和二十三年三月、新潮文庫）に対する自作「解説」の中で、「耶馬溪にまつはる伝説」について触れ、「近藤浩一路画伯の漫画で、その話を知」ったこと、そこで、それに基づいて「恩讐の彼方に」（大正八年一月『中央公論』）を執筆したことに言及しているのだが、ここである「漫画」とは、「近藤浩一路が読売新聞に連載した挿絵入りの紀行文『耶馬溪見物』（大6・11・26、12・10、全十三回）」であることが、片山宏行『菊池寛の航跡——初期文学精神の展開——』（平成九年九月、和泉書院）「恩讐の彼方に」をめぐって——その成立と性格——によって指摘されており、菊池が普段から『読売新聞』に目を通していた可能性があると分かる。実際、「私の生活」（大正九年一月『文章倶楽部』）では、菊池は「新聞は「日日」「朝日」「時事」「読売」を読んでいると、自らの「生活」を語っていた。しかも、「新聞投書の当り年」（大正八年五月『文章倶楽部』）では、菊池は「高等学校の三年から大学一年頃にかけて、金に困ったから、新聞の懸賞を盛にやった。その頃「読売新聞」や「二六新聞」などで、懸賞で新刊書籍の批評を募集してゐた」と回想していた。菊池の「大学一年頃」は、大正二年から大正三年にかけての時期であり、この頃の『読売新聞』にも目を通していただろうから、大正三年の『読売新聞』の「同情心を種に」を読んでいた可能性が高いことになる。先に紹介した「道を訊く女」と「同情心を種に」の内容には、偶然の一致とは見なしにくい共通点があるので、

「同情心を種に」が「道を訊く女」の材源であったと判断できる¹⁰⁾。

そこで、以下では、最初に、「道を訊く女」の主題の理解に努める。その後、その主題は、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「同情心を種に」の意図と合致するものであるのか否かを見定める。

「道を訊く女」の主題は、作品を締め括る傍線部④に表れている。この傍線部④のうち、「自分」が「不快なる記憶」を残した理由を説明する。傍線部③からは、「自分」が「女」に金銭を与えなかったことを残念に思っていたこと、そのために、「不快な記憶」を残すことになったことが読み取られる。何故に残念に思うのかというと、それは、傍線部②から、「騙された」と知つても快く与へた方が、「より多くの快感」を得られたのではないかと後悔する気持ちがあつたからであると理解できる。それほどまでに、「自分」には、「親切を為したと云ふ快感」への欲求が強かつたことになる。実際、そのように強かつたことは、傍線部①からも窺われる。したがって、傍線部④は、「親切を為したと云ふ快感」を欲しながら、それを得られず、心に蟠りを残す「自分」の心理を描写したものであつた。

「親切」は、建前から言えば、他者への思いやりからなされる、他者のための行為であり、そういう行為と受け取るのが社会通念である。そのため、「親切」を、「親切を為した」者に「快感」を与える行為と見て、その「快感」を得られずに、蟠りを残す「自分」の心理を表現した「道を訊く女」は、こうした社会通念と相容れない内容を含んでおり、世の一般女性にとって、自らの生き方の刺激・参考になる内容の有しているとは言い難

い。「同情心を種に」は、「夫人」と「姪」が金銭を詐取された話と整理できる記事であり、女性が記事内容の中心的な存在と位置付けられるのに対して、「道を訊く女」では、「女」が作品前半に登場するものの、作品の大部分は「自分」の心理描写であり、女性がそのように位置付けられてはいないので、そのことも考慮すれば、「道を訊く女」では、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「同情心を種に」の意図を踏襲しようとしていないと結論付けられる。

二

続いて、「愛嬌者」を取り上げる。「愛嬌者」のあらすじを紹介すると、次の通りである。――「鍛冶橋の袂に、夕刊を売る」、「十一、二」の「愛嬌のある」子供がいる。啓吉は、「その子供の愛嬌のある剽軽な所を愛して、努めてその子供から買つてやつた」。ある時、「まだ夕刊が一銭五厘に値上げをしない前の事だが、啓吉は夕刊を一枚買つて二銭銅貨を払ひ、釣銭はその子供に与る積で、折から動き出した電車に飛び乗つてしまつた」。「すると、その明くる日の夕方」、「夕刊売の子供は、チヨコ／＼走つて来て「小父さん、昨日の一銭は何うするの、俺に呉れるの」と、云つた。啓吉は、その無邪気な正直さに微笑せずには居られなかつた」。こうしたことがあつて後のある「冬の寒い晩」のことであつた。「夕刊売の子供」が、「鍛冶橋の白い花崗石の欄干に、べつたりと縋りつくやうにして泣いて居」た。それを見た啓吉は、泣いている理由を尋ねたところ、「お金を失くしたの」、「今、お金を勘定したら、五銭足りないの」

と答えた。同情した啓吉は「五銭の白銅を取出して」、子供に持たせてやつた。「啓吉は少年の困難を救つてやつた事が、可なり愉快であつた」。それから「二月も経つての事だらう。啓吉は、社から帰り道に、珍らしく同僚のKと道伴れになつた」。「鍛冶橋の停留場から乗る時に」、Kは、例の「夕刊売の子供」から、啓吉と「同じやうに夕刊を買」い、その後に、次のようなことを「嬉しさうに」啓吉に話しかけてきた。それは、「実は此間」、「鍛冶橋へ来ると」、あの「夕刊売の子供」が「しく／＼泣いて居」たこと、泣いている理由を尋ねたところ、「売上げを勘定して見ると二銭足りない」と答えたこと、そこで「二銭銅貨を一枚」その子供に与えたことである。この話を聞いて、「夕刊売の子供」に対する「強い深い疑念」が、啓吉に湧いてきた。「同じ社に勤めて居る」啓吉とKの二人が、あの「夕刊売の子供」に同じように金銭を与えて、その「子供を救つた」という「経験を持つて居る」とすれば、「夕方」に「鍛冶橋」を通り、同じようにあの子供に金銭を与えた者は、他に、少なくとも「十人や二十人」はいらゐると思われた。しかし、啓吉は、自らが「たつた五銭で、可なり大きい本質的な快感を得て、嬉しがつて居たやうに、Kは夫よりも少額の二銭で啓吉と同等以上の快感を得て欣である」と思うようになる。やがて、「此の子供は『善事を為したと云ふ快感』を、最も安価に売捌いてゐるやうなものだ」、「此の子供は、本当に世の中の愛嬌者に違ひない」と評価するようになった。

この作品では、「夕刊売の子供」という一人の人物が、近い時期に、同じ場所と同じような行為をして、啓吉とKから金銭を得ていた。ということは、この「夕刊売の子供」は金銭を詐

取る行為をしていたと設定されていた、ということである。したがって、啓吉は、「夕刊売の子供」に金銭を詐取されたと最後に認識したのだが、その認識は正しかったことになる。

さて、「愛嬌者」が「道を訊く女」を継承した作品であることは、両者のあらすじを見比べても明瞭で、前者は後者の改作であると言える。そのため、「道を訊く女」は、「同情心を種に」に影響を受け、それを下敷きにした作品であったのだから、「道を訊く女」を改作した「愛嬌者」は、「同情心を種に」からの影響を、少なくとも間接的には受けていたことになる。さらにいえば、「同情心を種に」では、一人の「男」が、「夫人」と「姪」の両方から金銭を詐取していたのだが、これは、「女」が「自分」から、「少年」がS生から、金銭を詐取しようと企んでいたのかどうか不確かであった。「道を訊く女」の設定よりも、一人の「夕刊売の子供」が、啓吉とKの両方から金銭を詐取していたとする「愛嬌者」の設定に近く、「愛嬌者」のこの設定については、「同情心を種に」からの直接的な影響があったと見られる。そこで、「愛嬌者」においても、その主題が、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「同情心を種に」の意図と合致するものであるのか否かを見定めなければならない。

「愛嬌者」の主題は、啓吉が、「夕刊売の子供」に「払った金額」よりもはるかに大きな価値を、この「子供」への「善事を為したと云ふ快感」に見出したので、金銭を詐取したその「子供」を最後には高く評価する心境になったことである。こうした主題は、「善事」を、他者への思いやりからなされる、他者のための行為とする社会通念、金銭を詐取した者を賞賛すべき

ではないとする常識的・道徳的な考えとは合致しない内容になっている。「同情心を種に」では、先述の通り、女性が記事内容の中心的存在と位置付けられるのに対して、「愛嬌者」では、女性がそのような位置付けられてはいないことも考慮すれば、「愛嬌者」でも、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「同情心を種に」の意図を踏襲しようとしていないことは明白である。

ここで、「愛嬌者」では、「同情心を種に」とは別の「婦人附録」の記事である、大正三年四月二十日の「新聞売の少女」をも材源にしているだろうことに触れておきたい。なお、これは、山本哲太郎という男性の投稿記事である。

先夜新橋博品館の前に差蒐ると橋の袂に咽ぶ様な細い声が私の耳に入りました。ふと顧みると六歳位の女の子が新聞の呼売をしています。私の如うな者でも惻隠の情に堪へず、五銭白銅を出して二枚の新聞を求めて立去らうとしますと、女の子は「お剩餘」といつて追蒐けて来ましたが「いらないよ」と言つても一向聞入れる様子もなく、竟に三銭の剩餘を私の手に渡して彼女は「新聞」と哀れ深い声を絞つて呼んでゐました一厘半銭も吹き掛け度いといふのが当今の商賈の常だと聴いてゐるのに此の少女は実に確実な営業主だと感心せずにはゐられませんでした。例へば貧しくとも、恚う云ふ子を持つた家庭の矜を私は羨ましく思ひます。

「新聞売の少女」の「先夜」という言葉から、この「六歳位の女の子」が「橋の袂」で売っていたのは「夕刊」であると判断できるので、「十一、二」歳の「子供」が「夕刊」を「鍛冶

橋の袂」で売っていたという「愛嬌者」の話と類似している。また、「私」がこの「女の子」に「三銭」多く与えて立ち去った時に、「女の子」が「三銭」多く受け取ったことを「私」に伝えた「新聞売の少女」の傍線部⑥は、啓吉が「夕刊売の子供」に「一銭」多く与えて立ち去った翌日、「夕刊売の子供」が「一銭」多く受け取ったことを啓吉に伝えた「愛嬌者」の傍線部⑤と類似している。菊池は、「道を訊く女」・「愛嬌者」の執筆のために、「婦人附録」の「同情心を種に」を材源にしていた。『読売新聞』を普段から読んでいたので、「婦人附録」に着目していたのだろう。そのことを前提にすれば、「愛嬌者」の執筆のために、「婦人附録」の「新聞売の少女」をも材源にしたと考えてよい。

もっとも、「新聞売の少女」の傍線部⑥と「愛嬌者」の傍線部⑤とが完全に一致しているわけではない。「新聞売の少女」では、「女の子」は、多く受け取った「三銭」を「私」に返す意志を強く持ち、実際に返したのに対して、「愛嬌者」では、「夕刊売の子供」は、多く受け取った「一銭」を「俺に呉れるのか」と啓吉に質問するだけで、返しはしなかった。

「新聞売の少女」は、「婦人附録」の記事であり、かつ、「恙う云ふ子を持った家庭の矜」という言葉もそこにあるので、「家庭」で、子育てをしている人間、もしくは、これから子育てをする人間に向けて、特に、「婦人附録」の記事の中心は女性に関わる問題であったことも踏まえれば、子育てをしている女性、もしくは、これから子育てをする女性に向けて、「三銭」を返しに行った「女の子」のような、正直な子どもに育てることが大切であると思われる記事になっているだろう。つまり、女性

の生き方の刺激・参考になる記事になっている。それに対して、「愛嬌者」では、「夕刊売の子供」の先の言動は、「無邪気」さはあるながらも、「一銭」を返さないでいきたいとする思惑があることが垣間見える描き方になっているので、しかも、この「子供」が金銭を詐取する行為をしていたことが後に判明したこともあり、こうした子供に育てたいと思わせる内容にはなっていない。「愛嬌者」では、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝える「新聞売の少女」を利用しつつ、そのように伝えようとする意図を踏襲することも回避していたことになる。

三

以上のように、菊池は、「道を訊く女」・「愛嬌者」を執筆するにあたり、「婦人附録」の記事を材源にしながらも、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「婦人附録」の意図を踏襲していなかった。では、こうした創作姿勢は、全体としての菊池文学の傾向とどう関係するのか。この問いに答えるために、菊池が、「女性論」と一括りにできる評論をしばしば発表していることに注意したい。そのように発表していることは、「女性論集・史伝六」と題された、『菊池寛全集』第二十一巻（平成七年七月、文藝春秋社）から知ることができる。この第二十一巻には、単行本として刊行された、『恋愛と結婚の書』（昭和十年十二月、モダン日本社）・『日本女性読本』（昭和十二年五月、東京日日新聞社、大阪毎日新聞社）・『新女大学』（昭和十三年八月、モダン日本社）に収められた九篇の「女性論」及び十八の身上相談の回答、単行本に収められていない八

十四篇の「女性論」が収録されていて、菊池が発表してきた「女性論」の主要なものを読むことができる⁽¹¹⁾。これらの「女性論」は、その殆どが当時の日本の恋愛や結婚に関する話題を扱ったものであり、女性は、貞操を大切にすべきである、恋愛についての知識を増やすために文学作品を読むべきである、男性から金銭的な恩恵や親切を安易に受けてはならないなどといった調子で、女性の心得を専ら説いている。このような「女性論」を発表する動機については、前掲の『恋愛と結婚の書』の序の「現代日本の子女を、恋愛の災禍や不幸から救ふためには、恋愛についての心得や道徳が、もつと公然と説かれていゝと思ふのである。／結婚に就いても、その心得や道徳が、少しも説かれてゐないやうである。(中略)とにかく、この本を読んで頂ければ、恋愛及び結婚生活について、必ずある程度丈は、賢くなつて貰へると思ふのである。／恋愛及び結婚については、当事者の愚かしさや無知のために、不幸になつてゐる場合が、可なり多いやうに思はれるのである」という言葉から窺い知ることが出来る。

ただし、菊池の「女性論」で扱われるのは、恋愛や結婚に関する話題に限定されているわけではない。例えば、「目のつけどころ」(昭和四年五月『婦人倶楽部』)では「教養」を持った女性、「個性の出た服装」をする女性が魅力的であることを、また、「女性心得草——若き人々のために」(昭和九年十二月『婦人倶楽部』)では、女性が、「映画」や「音楽」や「文学」や「時事問題」にある程度通じていること、「郵便に就いての知識」を持つていること、「身だしなみ」を整えていること、「遠慮」し過ぎないでいることなどが望ましいことを説き、女性の日常

のあるべき姿や心得に言及している。このことを視野に入れつつ、菊池が「男性本位」の世の中を生きなければならない女性を「非常に気の毒」(「実用結婚学(結婚篇)」(昭和九年二月『婦人倶楽部』))に思うと語っていることも考え併せれば、「男性本位」の世の中を、女性が少しでも不幸に陥らずに生きられるよう、当時の女性の人生に最も大きな影響を与えていたであろう恋愛や結婚の心得を説くことに軸足を置きつつ、それ以外の日常生活での心得も説いた「女性論」を、つまり、女性の生き方の刺激・参考になる「女性論」を、数多く発表していたと整理できる。

この第二十一巻に収録された「女性論」のうち、発表時期が最も早いのが「私の嫌ひな女」(大正七年十月『婦人公論』)であり、それに続けて、「婦人と活動写真」(大正九年十月『新家庭』)、「悲惨なる滑稽」(大正十年二月『改造』)、「真珠夫人」のモデルと自認せし白蓮女史」(大正十年十二月『婦女界』)を発表しており、それ以降も、「武士道と日本婦道」(昭和十七年九月『主婦之友』)に至るまで、継続的・精力的に「女性論」を発表している。ただし、「私の嫌ひな女」は、作家・評論家・学者等の知識人五十八名に、嫌いな女性の型について回答してもらふという『婦人公論』の企画に応じた文章で、菊池が主體的に執筆したものではない。しかも、この「私の嫌ひな女」は、「有名な女」が「嫌ひ」だとする単純な感想を、百三十字程度の短文で寄せたものであるに過ぎないので、「女性論」として十分な質と量とを備えておらず、他の「女性論」と同列に扱うことはできない。したがって、第二十一巻に収録された菊池の「女性論」は、実質的には、大正九年の「婦人と活動写真」

の頃以降に盛んに発表されるようになったと言える。

このことは、大正九年より前の時期には、つまり、「道を訊く女」・「愛嬌者」を発表した時期には、こうした「女性論」を発表したことが実質的になかった^(四)、ということを意味している。ここで、先の問いに答えることができる。それは、女性の生き方の刺激・参考になる「女性論」を発表することへの関心が高くなかった大正九年より前の菊池の傾向と関係があった、という答えになる。

ただし、こう答えるだけでは十分ではない。大正九年より前に「女性論」を発表することが実質的になかった理由、大正九年以降に「女性論」を盛んに発表するようになった理由がこれだけでは不明であるからだ。そこで、その理由を明確にするため、『菊池寛全集』全巻（平成五年十一月～平成十五年八月）の編集者による、収録作品に対する「短篇小説」と「長篇小説」の分類を参考にして、大正九年の「真珠夫人」（大正九年六月九日～十二月二十二日『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』）より前の菊池の小説は全て「短篇」であったのだが、「真珠夫人」以後の菊池の小説の中心が「長篇」に移行したこと、この「短篇小説」から「長篇小説」への移行という形式的な変化は、内容の変化とも対応していて、両者の内容には大別できる特徴があることを説明する。

『菊池寛全集』の中で、一篇でも小説を収録している巻を挙げておくと、第二巻（平成五年十二月）から第十五巻（平成七年一月）と補巻第四（平成十五年三月）である。このうち、第二巻は「短篇小説集一」、第三巻（平成六年一月）は「短篇小説集二」、第四巻（平成六年二月）は「短篇小説集三」という

題が付けられており、「短篇」と分類できる小説が収録されている。また、第五巻（平成六年三月）は「長篇小説集一」という題が付けられ、以下、「長篇小説集」は第十五巻「長篇小説集十一」まで続く。これらには、「長篇」と分類できる小説が収録されている。ただし、第十五巻は「長篇小説集」ではあるが、この中に、分量は多くないものの、「短篇小説集」という項目を設けて、「短篇小説」も収録している。また、補巻第四では、戯曲・小説・評伝・児童文学に分類して作品を収録している。このうち、補巻第四の小説は、「短篇」と「長篇」に分類されているわけではないが、全て「短篇」と考えてよいだろう。というのも、第二巻から第四巻と第十五巻の「短篇小説集」に収録された「短篇小説」のうち、『菊池寛全集』でのページ数が最も多い作品は、「友と友の間」（大正八年八月十八日～十月十四日『大阪朝日新聞』）の五十七ページであるが、補巻第四に収録された小説は、全て二十ページ以下であるからだ。

さて、第二巻から第十五巻と補巻第四に収録されている全ての小説のうち、「真珠夫人」より前に発表されたものは、第二巻と補巻第四という「短篇小説」を収録する巻にある五十二の「短篇小説」である。したがって、「真珠夫人」より前の菊池の小説は全て「短篇」と分類できる。

それに対して、「真珠夫人」をきつかけにして、「短篇小説」よりも「長篇小説」の執筆の分量が増えるようになる。前掲の「長篇小説集一」から「長篇小説集十一」に収録された「長篇小説」のうち、発表時期が最も早いのが「真珠夫人」であること、「真珠夫人」以後の「短篇小説」と「長篇小説」の『菊池寛全集』におけるページ数の合計をそれぞれ計算すると、前者

は百八十二作品、千六百四十四ページで、後者は四十七作品、六千九百九十九ページであった（論者注——初出紙誌が判明していない作品は計算の対象外としている）ことから、そのように考えてよい。過去半生を回想した「半自叙伝」（昭和二十二年六月『新潮』）の「真珠夫人」は幸ひにして、圧倒的な世評を博して、私の通俗長篇作家としての位置を確定した」という言葉に示唆されている通り、「真珠夫人」は、菊池が最初に発表した「通俗長篇」である。これが「圧倒的な世評を博し」たこともあり、以後、「真珠夫人」と同系統の「長篇小説」の執筆に傾斜したと推察される。そのため、「真珠夫人」より前の菊池の小説は全て「短篇」であったが、「真珠夫人」以後の菊池の小説の中心が「長篇」に移行したと纏められる（五）。

「短篇小説」から「長篇小説」への移行というこの形式的な変化は、内容の変化とも対応している。具体的には、それは、多少の例外^六はあるにせよ、「真珠夫人」より前の「短篇小説」では、作品発表に近い時期の近現代の日本の男女の恋愛や結婚に関する話題を取り上げていないのに対して、「真珠夫人」以後の「長篇小説」では、その話題を、作品の軸になるものとして必ず取り上げるようになる、という変化である。

となると、先述の通り、この恋愛や結婚に関する話題は、「女性論」の中で好んで扱われた、女性の生き方の刺激・参考になると菊池が考えていた話題であるので、「短篇小説」から「長篇小説」への移行に伴うこの内容の変化は、女性の生き方の刺激・参考になる話題を取り上げることに関心が低かった姿勢から、高くなった姿勢への変化と言い換えられる。大正九年より前には、女性の生き方の刺激・参考になる「女性論」を実質的

に発表しなかったのに、大正九年以後、そうした「女性論」を継続的に発表するようになったのも、この変化のためである。したがって、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「同情心を種に」・「新聞売の少女」の意図を踏襲しなかった「道を訊く女」・「愛嬌者」の創作姿勢は、そうした話題を伝えることへの関心が低かった、大正九年の「真珠夫人」より前の菊池の小説や評論の傾向を示していたと言える。

四

もつとも、そうだからといって、「道を訊く女」・「愛嬌者」が、「真珠夫人」以後の菊池の小説や評論の傾向と何の関係もない作品であったわけでもない。続いて、そのことにも論及する。そもそも、菊池は、「道を訊く女」・「愛嬌者」の執筆にあたり、数多くある創作のための材源の中で、「婦人附録」の「同情心を種に」・「新聞売の少女」という、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝える記事を、材源として二つも選択していた。このことは、「道を訊く女」・「愛嬌者」の時点で既に、こうした話題への関心があったことを意味していると見るべきだろう。勿論、この時期には、「道を訊く女」・「愛嬌者」の先述した内容からも窺われる通り、常識や道徳を相対化する発想を形にしていくことに面白さを見出す向きがあったので、女性の生き方の刺激・参考になる、いわば、道徳的というべき「女性論」を読者に伝えること、あるいは、そうした「女性論」と関連する主題を小説作品の中で表現することはほぼなかった。しかし、そのことと、「道を訊く女」・「愛嬌者」の時点でその話

題への関心があつたこととは矛盾しない。したがって、「道を訊く女」・「愛嬌者」を執筆する菊池の中には、女性の生き方の刺激・参考になる「女性論」や「長篇小説」を数多く発表する「真珠夫人」以後の菊池の姿勢に繋がる関心が潜んでいたとも解釈できる。

この解釈の妥当性を裏付けるために、『菊池寛全集』第八巻（平成六年六月）に収録されている、「真珠夫人」より後の「長篇小説」である前掲の「新女性鑑」を取り上げる。この作品の主題は、そのタイトルから、「女性」の「新」しい「鑑」＝模範を示すことにあると理解できるので、「真珠夫人」以後の右記の菊池の姿勢をよく示した作品である。さて、この作品では、自らの享楽生活のことしか考えないわがままな「ブルジョアの婦人」である夏江の生き方と対比させる形で、困難が待ち受けていることが予想されるにもかかわらず、自らが「信じるまゝに」、恋人である長瀬との愛を貫き、率先して長瀬とともに夏江のもとを立ち去ろうとする久美子の強い生き方を、最後に強調している。長瀬とは、「資本のない者が、働かうとすれば、資本を持つてゐる者のいひなり放題にならなければならない」現在の「社会組織」の「間違ひを正す」ために、「細民街へ出かけて」「社会事業」を行い、また、「労働者の子供を集めて」、その「間違ひ」であることを「教へ」る活動をしているが、そのために、危険思想の持ち主として、警察から警戒されている人物である。久美子は、この長瀬の恋人であり、結婚の約束を交わしている。長瀬と結婚しても「物質的な幸福」を得られないにもかかわらず、また、長瀬が警察から追われる人物であるにもかかわらず、長瀬の正しさを信じ、長瀬とともに生きよ

うとする。久美子のこうした一途な姿こそが、「女性」の「新しい「鑑」と意味付けられている」。

ところで、長瀬が、先日、人から聞いたという、「スリ」を働いた少年に関する話を久美子に語る場面がある。それは、次のような話である。――「今年の冬」に「ある紳士が銀座の横町を歩いてゐた」時に、「擦れちがひざまに、ポケットへ手を入れ」てきた「スリ」がいた。「紳士はすかさず捕へて見ると、まだ十二三の子供」で、「色が真青で今にも、倒れさうに、ヒヨロ／＼してゐた」。「可哀さうになつて」、「スリ」をした理由を聞いてみると、「お父さんは去年の暮に死にお母さんに兄妹四人で、自分が長男だが、昨日の晩から、一家中何も食べてゐない」と答えた。そこで、「紳士」は「好奇心と憐憫の情」とから、この「少年」の言葉の真偽を確かめようと、「少年」の家まで行つてみることにした。行つてみると、「ひどい貧民窟」で、「少年」の家も「四畳半一間のバラックで、母親と少年の弟と妹とがベツトリと垢のついた汚いふとんの上に、くつき合つて寝てゐ」た。「紳士」は、入口でそれを見ると、「たまらなくなつて十円札を一枚少年の手に握らせ」た。「翌日」、この「紳士」は、「会社へ行つてその話を皆にした」ところ、「そんなスリになら、俺も会つたと云ふ人が出てきた」。そこで、その同僚の話を聞いてみると、その同僚も、「日本橋の横町」で、自らに「スリ」を働いた「少年」を捕まえたのだが、「事情をきいて見ると」、その「少年」は、「親父が去年の暮に死んで、母親と兄妹が四人あり、昨夕から何も食べてゐない」と答えたので、「可愛さう」になり「五十銭」を「少年」に与えたということであつた。しかも、その同僚が言う「少年の恰好や

容姿」は、「紳士」が言う「少年」のそれと「符節を合はせるごとく」であつたことも確かめられた。この「少年」は、この「紳士」とその同僚以外の複数の人間に対しても、「わざとつかまるやうに」、「スリ」を行いつつ、捕まつた時に、自らの哀れな境遇を示して、自らを捕まえたその人間の同情を誘い、それにより、その人間から金銭を得ていたことも後に判明する。

長瀬はこのような話を久美子にした後、この「少年」一家が「元来みじめ」な生活をしていたことは事実であるのだから、この「少年も憎めない」として、「貧乏人を現在のやうな状態に捨てゝ置く以上、彼等がどんなことをやらうが、咎めることは出来ないと思ふ」とも伝えている。ここには、貧しい労働者を救済すべきとする先述の長瀬の思想が表れている。そして、それを受けて、「久美子と、長瀬の話は、たいていこんな話ばかりだつた。然し久美子は楽しかつた」という記述が続いている。長瀬と久美子のこのような関係を描写することにより、危険思想と見なされかねない長瀬の言葉に共感し、長瀬への信頼と愛を深めていく久美子の姿勢は鮮明になる。そのため、長瀬が「スリ」を働いた少年に関する話を久美子に語る場面は、「女性」の「新しい「鑑」として久美子を描写しようとしたこの作品の主題を支える働きをしていたことになる。

さて、「新女性鑑」のこの場面は、「同情心を種に」・「道を訊く女」・「愛嬌者」の内容と類似しており、大枠では、これら全てを受け継ぎ、利用したものである。細かく見れば、「十三」の「少年」が、「紳士」とその同僚から、同情心を誘う同様の手口で金銭を得ていたという「新女性鑑」の設定は、「十一」、「二」の「夕刊売の子供」が、啓吉とその同僚のKから、同情心

を誘う同様の手口で金銭を詐取していたという「愛嬌者」の設定に最も近く、直接にはこれを受け継いだものである。また、「紳士」が「少年」のことを同僚に話したので、「紳士」と同僚の二人が、「少年」から同様の手口で金銭を奪われたことを初めて知つたという「新女性鑑」の展開は、「夫人」が「男」のことを「姪」に話したので、「夫人」と「姪」の二人が、「男」から同様の手口で金銭を奪われたことを初めて知つたという「同情心を種に」の展開を踏まえている^(九)。さらに、「少年」が同情心を誘う手口で金銭を得ようとしたのは、「少年」が「貧乏」していたためであると、長瀬が女性である久美子に語り、久美子はその話に共感していくという「新女性鑑」の展開は、「男」が同情心を誘う手口で金銭を詐取していたのは、「男」が「貧窮」していたためでろうと読者に伝えつつ、類似の出来事に遭遇した時にどう振舞うのがよいのかを女性に考えさせようとした「同情心を種に」の意図を受け継いでいるだろう。「同情心を種に」は、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝える記事であり、その記事を材源にした「道を訊く女」・「愛嬌者」を執筆する菊池の中にもそうした話題に対する関心が潜んでいた^(九)ので、菊池は、「女性」の「新しい「鑑」を示そうとする「新女性鑑」の主題を支える場面描写に役立つ素材としてこれらの記事・作品を想起し、これらを利用したと見なし得る^(九)。となれば、「道を訊く女」・「愛嬌者」を執筆する菊池の中には、先述した「真珠夫人」以後の菊池の姿勢に繋がる関心が潜んでいたと判断できる。

以上、本稿では、「真珠夫人」より前の「短篇小说」である「道を訊く女」・「愛嬌者」が、「婦人附録」の「同情心を種に」

・「新聞売の少女」を材源にした作品であったこと、「真珠夫人」より後の「長篇小説」である「新女性鑑」もまた、「同情心を種に」を材源にした作品であり、かつ、「道を訊く女」・「愛嬌者」と密接な関係にある作品であったこと、「道を訊く女」・「愛嬌者」を執筆する菊池の中に、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「真珠夫人」以後の菊池の姿勢に繋がる関心が潜んでいたことを主に明らかにした。「真珠夫人」を契機として、菊池の小説や評論の傾向は急激に変化するもので、「真珠夫人」より前と以後との差異ばかりにとすれば注意の目が向けられがちになるのだが、両者の接点を把握することも必要なことだろう。本稿では、その一つの接点を確認することができた。

付言すれば、右の如く明らかにしたことによって、第一に、「真珠夫人」より前の「短篇小説」全体の意味を、第二に、「真珠夫人」以後の「長篇小説」全体の意味を検討するための足掛かりとなり得る推定が可能になる。最後に、そのことも述べておきたい。

まず、第一について言えば、女性の生き方の刺激・参考になる話題に対する関心が支えとなった、「真珠夫人」より前の「短篇小説」は、「道を訊く女」・「愛嬌者」以外にも少なからず存在していたのではないか、そのような「短篇小説」を執筆してきた経験が、「真珠夫人」以後の「女性論」や「長篇小説」の土台となっていたのではないか、という見通しを立てることができるようになる。「男性本位」の価値観が支配的な世の中で、不幸を抱えて生きることの多かった女性に対する同情や、そうした同情を促す道徳的心情は、たとえそれが表面化されていない

くとも、「真珠夫人」より前の初期の頃から、菊池の中に存在しており、菊池の創作活動の源泉になっていたのではないかと推定できるようになるのである。また、第二について言えば、「新女性鑑」と、その材源の一つである「同情心を種に」とを比較してみると、後者は、「婦人附録」の「穩健・善導主義」が反映されている記事であったのに対して、前者は、注(七)で述べた通り、国家権力によって弾圧される危険性のある女性の生き方を「鑑」と意味付けており、「穩健・善導主義」とは必ずしも合致しない内容になっていたことが見えてくるので、「真珠夫人」以後の「長篇小説」では、この「新女性鑑」のように、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝える上で、「穩健・善導主義」に留まらない、革新的な主題を表現することもまた時に目指されていたのではないかと推定できるようになる。

本稿の論述内容から、こうした推定を導いてくることができる。これらの推定の可否を確定することは、「真珠夫人」より前と以後の菊池の小説の意味やその関係を把握するために必要なことであると思われる。

〔注〕

(一) 金銭を詐取される可能性もあるのだから、見知らぬ男に道を訊かれても安易に金銭を与えない方がよいと考える女性が多くなるのではないかと想像される。ただし、「其日暮しの細民が貧窮の余り、斯くの如き罪惡を敢てするのでありませう」という結びの言葉を踏まえて、貧困に苦しむ者の一助になることもあるから、たとえ金銭を詐取されることになったとしても、少額であれば、

道を訊かれた時に金銭を与えてもよいと考える女性もいるのかも知れない。

(二) 寺田寅彦「蒸発皿」(昭和八年六月『中央公論』の一「亀井戸まで」)では、「自分」が、駅前で、見知らぬ男に道を訊かれた時に、この男は、道を訊いて、それをきっかけにして「自分」から電車賃を詐取しようとしているのではないかという疑いを持ったことを話題としており、「道を訊く女」とよく似ている。この「蒸発皿」を含む単行本の『蒸発皿』(昭和八年十二月、岩波書店)の「序」で、この単行本のことを「随筆集」と寅彦が述べている

ことから、「蒸発皿」の「亀井戸まで」は随筆で、寅彦は「蒸発皿」の「亀井戸まで」で書いたことを実際に経験したと言える。ところで、この随筆で、「自分」＝寅彦は、この見知らぬ男に疑いを持ったとはいえ、最終的には、「芝居をして迄も、たつた一枚の切符を詐取しなければならぬ人が仮りにあるとすれば、それ程に不幸な憐れな人がさうさらに沢山此世にあるであらうとは思はれない」と総括していた。日常の出来事の細やかな観察者であり、世間の事情にも通じていたであろう寅彦がこう述べるのだから、道を訊いて電車賃を詐取しようとする者が実際に「沢山此世に」いたわけではなかったらうこと、それ故、そうした者を取り上げた記事が新聞や雑誌によく掲載されていたわけでもなかったらうことを指摘できる。そのため、「同情心を種に」と同一あるいは類似の出来事を取り上げた記事が他の雑誌や新聞に掲載されていた可能性、菊池が、「同情心を種に」だけでなく、そうした記事をも参考にした可能性は低いと言える。もっとも、その可能性を完全に否定することはなおできない。そこで、その可能性の程度についてさらに検討するため、試みに、菊池が読んで

いた『朝日新聞』の、「同情心を種に」で記載された出来事のあった大正三年十一月から、「道を訊く女」の発表時期より前の大正六年一月までの記事を調査してみた。その結果、同一あるいは類似の出来事を扱った記事は見出せなかった。調査範囲をさらに広げる必要があるかも知れないが、『朝日新聞』に対するこの調査結果は、右の可能性の低さを裏付ける一つの証拠とはなるだろう。「道を訊く女」の材源を「同情心を種に」のみに特定してよいのではなからうか。

(三) 後掲の『菊池寛全集』全巻を読めば、第二十一巻に収録された「女性論」以外にも、菊池が、その「女性論」と類似する内容を持った評論や随筆を執筆していたことを確認できる。そのような評論や随筆を具体的に挙げれば、「文芸と人生」(大正十三年十月『婦女界』・「文芸と人生」(大正十五年一月『キング』・「文芸と人生」(大正十五年十二月二十二日～二十五日『秋田魁新報』・「文芸と生活」(昭和五年一月『雄弁』)という菊池の講演速記または要旨を掲載した作品、「モダンガールを書いた始め」(昭和三年二月十二日『東京日日新聞』、「新珠」に就いて」(昭和三年二月二十日『長篇小説月報』、「菊池寛氏縦横談」の「女に四つの型あり」「女の魅力」(昭和六年一月『キング』、「ある身上相談の再批判」「医師に頼んで堕胎を行ふべし 罪となる不名誉に非ず」(昭和七年五月『女人芸術』、「家庭相談」「敢然良人に従ひなさい」(昭和八年一月十八日『報知新聞』、「結婚解消問題に就て」(昭和八年三月二日、三日『報知新聞』、「結婚について」(昭和八年七月『雄弁』、「結婚生活について」(昭和八年十一月十八日『東京朝日新聞』、「恋愛相談」(昭和九年七月～昭和十年十二月『話』、「文芸と人生」(昭和十年七月『青年』、雑誌『ホ

ーム・ライフ』に掲載された「月次雑誌」の「離婚」（昭和十年九月）・「恋愛と誘惑」（昭和十年十二月）・「美醜」（昭和十一年三月）・「恋愛から結婚へ」（昭和十一年六月『新興夫人』）、「女性相談」（昭和十一年八月一日、七日、八日、十一日、九月二日、四日、九日、十日、二十二日、二十四日、二十九日『大阪毎日新聞』）、「恋愛・結婚・家庭」（昭和十二年七月『審理』）、「字窓を出んとする若き人々に」（昭和十四年四月『新女苑』）、「文藝春秋」に掲載された「話の塵」の「貞操の価格」（昭和十四年十一月）・「相手を不幸にするな」（昭和十四年十二月）、「貞操に就いて」（昭和二十一年八月『りべらる』）、「新憲法と新道徳」（昭和二十二年三月『婦人倶楽部』）、「現代の貞操市場」（昭和二十三年三月『美貌』）である。

(四) 注(三)に挙げた作品は全て大正九年より後に発表されたものであるで、これらの作品を考慮しても、菊池が「女性論」を発表したのは、実質的に大正九年以降であるとする先述の論述内容を変更する必要はない。

(五) 尾崎秀樹「新聞小説の特質——新聞小説論にふれて——」（昭和五十二年十二月『国文学解釈と観賞』）では、「『真珠夫人』は菊池寛にとつて最初の通俗小説であり、それはあらゆる意味で彼自身の文学的生涯に転機をもたらすものだった」と説明されている。この説明をより詳細にしているのが、工藤哲夫「菊池寛論——通俗小説とのかかわり合い方について——」（昭和五十八年六月『女子大国文』）である。この論文では、「大正九年に初の通俗小説『真珠夫人』を書いて以来、菊池寛は純文学と通俗小説の二本立てでやって来たが」、「昭和二年〜三年」に「完全に純文学からは足を洗った」ことを論じている。つまり、「真珠夫人」よ

り前の小説は「純文学」に該当するとしつつ、「初の通俗小説」である「真珠夫人」を発表して以後のしばらくの間は、「純文学」と「通俗小説」の両方を執筆していたこと、「昭和二年〜三年」以降は、「通俗小説一本槍」になったことを指摘している。本稿で言うところの「真珠夫人」より前の「短篇小説」と「真珠夫人」以後の「長篇小説」とは、それぞれ、工藤論文で言うところの「純文学」と「通俗小説」に該当するだろう。したがって、本稿でも、「真珠夫人」を契機に、菊池の小説の中心が、「純文学」から「通俗小説」へと移行したと説明してもよかつたのかも知れない。ただし、そもそも、どのような基準を満たせば、ある作品を「純文学」もしくは「通俗小説」と定義できるのかという点が曖昧であり、かつ、菊池自身も評論や随筆の中で、「真珠夫人」より前の「短篇小説」の全てが「純文学」に該当し、「真珠夫人」以後の「長篇小説」の全てが「通俗小説」に該当すると明言しているわけではないので、本稿では、慎重を期して、「純文学」・「通俗小説」という呼び方を避けた。

(六) 先述の通り、「真珠夫人」より前の「短篇小説」と分類できる作品は五十二篇であるが、このうち、「父の模型」（大正七年十月『新潮』）・前掲の「友と友の間」・「慎ましき配偶」（大正九年四月『婦人画報』）は、作品発表と近い時期の日本の恋愛や結婚に関する話題を扱っていて、例外的である。ただし、この三篇では、そのような話題を扱っているにもかかわらず、男女間・夫婦間の恋愛感情や恋愛をめぐるやりとりが殆ど描写されていない。そのため、それらを詳細に描写している「真珠夫人」以後の「長篇小説」とは異質である。

(七) ただし、当時において、共産主義的な思想を持った長瀬を支え

ようとする久美子のような存在は、国家権力から弾圧される危険性があつた。菊池は、そのことに無自覚であつたわけでもない。

例えば、「勝敗」（昭和六年七月二十五日・十二月三十一日『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』）において、共產主義者の健二と親しくしていた町子が「警察で苛酷な訊問に」あい、「発狂して松沢病院に送られた」という話を書いていることから、そう考えてよい。したがって、菊池は、「新女性鑑」において、久美子のような生き方を、女性の「新」しい「鑑」になるものとして肯定的に意味付けたにせよ、その生き方が、女性の幸福に確実に結び付くとまで考えていたわけではなかつただろう。

（八）「道を訊く女」では、「自分」はS生に対して、「自分」が経験したことを何も話していないので、S生は、道を訊いてきた「少年」に金銭を詐取されたかも知れないと考えることはなかつたし、また、「愛嬌者」でも、啓吉はKに対して、自らが経験したこと何も話していないので、Kは、「夕刊売の子供」に金銭を詐取されたことに気付いていない。両作品のこうした展開は、「新女性鑑」・「同情心を種に」のここで挙げた展開とは異なっている。

（九）金銭を与える人間と与えられる人間の関係を取り上げる「同情心を種に」・「道を訊く女」・「愛嬌者」は、貧富の差が社会の中に存在することを示唆する内容になっている。そのため、「新女性鑑」において、「同情心を種に」・「道を訊く女」・「愛嬌者」を利用したのは、これらを利用すれば、貧富の差を放置する現在の「社

会組織」に憤りを覚える「新女性鑑」の長瀬の考え方を描写しやすかつたからであるとまずは説明できる。ただし、右のように利用した理由はそれに留まらないだろう。そもそも、「新女性鑑」の主題は、長瀬とともに生きようとする久美子の姿を、「女性」の「新」しい「鑑」として示すことであつた。そのため、そのように示すために必要な素材として、「同情心を種に」・「道を訊く女」・「愛嬌者」を意識して、これらを利用した、という側面もあつたはずである。具体的には、長瀬が右の考え方を女性である久美子に伝え、久美子が共感していくという「新女性鑑」の内容を描写するための素材として、「同情心を種に」・「道を訊く女」・「愛嬌者」が、特に、女性の生き方の刺激・参考になる話題を伝えようとする「同情心を種に」が意識されたことだろう。そこで、本稿では、右記のような側面もあると論じた。

〔付記〕

菊池寛の作品の引用は『菊池寛全集』（平成五年十一月・平成十五年八月、文藝春秋社）による。引用に際しルビ等を適宜略し旧字を新字に改めた。引用箇所のは改行を意味し、傍線は論者によるものである。

（たぐさり かずま・高知大学教授）